【翻訳】

ロベルト・ミヘルスの同時代人論（5）

――マックス・ウェーバー――

氏家伸一

訳者前書き

本稿はロベルト・ミヘルスの『重要人物』（"Bedeutende Männer"）（一九二七）におさめられた「マックス・ウェーバー」を訳出したものである。『重要人物』は、一九〇八年から一九二〇年にわたりミヘルスが書きとめた、幾分回想風的な同時代人論をまとめたもので、ドイツ人五人、イタリア人三人がその対象となっている。前者のうちわけは、A・ベーベル（一八四〇―一九一三）、G・シュモラー（一八三八―一九一七）、マックス・ウェーバー（一八六四―一九二〇）、W・ゾンバルト（一八六三―一九四一）、そしてミヘルスの血縁にあたる詩人のW・M・フォン・ケーニヒスヴィンターである。後者にはE・デ・アミーチス（一八四六―一九〇八）、V・パレート（一八四八―一九二三）、C・ロンブローゾ（一八九六―一九〇九）が含まれている。訳出はイタリア人の方から始め、本誌前号（第一五巻第三号）の「エドモンド・デ・アミーチス」でイタリア人の部分は終了した。ただその際、ドイツ人の部分から、我が国ではほとんど無名といってよいフォン・ケーニヒスヴィンターを割愛し、そのかわり、「ガエターノ・モスカ」（一八五八―一九四一）を「ロベルト・ミヘルスの同時代人論」(1)としてつけ加えることにした。本号から、ミヘルスの人生の前半の舞台であるドイツ

の同時代人論が始まる。

尚、イタリア人の場合と同様、四人のドイツ人はすべてミヘルスと個人的にも面識のあった人物であり、そのためもあってか、本書の序文には、これらの評伝の特徴はその「性格学的研究」にある、と述べられている。

さて、本号に訳出した「マックス・ウェーバー」は、ウェーバーの死（一九二〇年六月四日）の直後、一九二〇年七月一四日、スイスの日刊紙『バーゼル報知』（Basler Nachrichten. Nr. 296.）に発表した追悼文に手を加えたものである。マックス・ウェーバーはロベルト・ミヘルス（一八七六―一九三六）よりも一二才年長であり、第一次世界大戦をはさむ、様々な意味での（従って思想史的意味においても）激動の時代を通して、いわば「背後で問いかける者」乃至「批判的助言者」（*Wilfried Röhrich*, "Robert Michels–Vom sozialistisch-syndikalistischen zum faschistischen Credo." 1972. s. 14. 38.）として、彼を励まし続けた。また、ウェーバー家とミヘルス家の間では家族ぐるみの交際が保たれた。従って、この追悼文の背後に、我々はミヘルスの深い感慨を推し量ることができるのである。ミヘルスにとってウェーバーは、思想的、学問的に、師匠であると同時に論敵でもあり、一九二〇年代のミヘルスにとっては、ファシズムへの転向を合理化してくれる（とミヘルスは考えた）指南役の一人であった。

ウェーバー研究者として著名なW・J・モムゼンは、「マックス・ウェーバーとロベルト・ミヘルス――非対称的なパートナーシップ」（*Wolfgang J. Mommsen*, "Max Weber and Roberto Michels–An asymmetrical partnership", in "Archives Ewropeannes de Sociologie." XXII, 1981.）と題した論文において、ウェーバーとミヘルスの関係は「伝記」と思想「体系」の二つのレベルで非常に興味深い関係である、と語っている。（モムゼン・一〇〇頁）

(一)　非対称的なパートナーシップ――庇護者ウェーバー

ウェーバーとミヘルスとは、ミヘルス自身も述懐している通り、「長年にわたる親密な友情」（本稿一二一頁）でむすばれ、それは、ウェーバーのもった個人的な関係の中でも「最も安定したもの」であった。（モムゼン、一〇〇頁）ミヘルスがトリーノへ移った一九〇七年の後も、ウェーバー夫妻はしばしばミヘルスのもとを訪れている。ウェーバーの妻マリアンネの『マックス・ウェーバー』（二七九頁、三六六頁）には、トリーノのミヘルス家の様子を描いた個所もあり、ウ

ェーバーのイタリア行は彼の神経症の回復に有益だったようにみえる。

「君には、すぐには了解できない抵抗に出会うと猪突猛進するところがあるが、他方、幾分傷つき易いところもある。」ウェーバーは一九〇八年六月、ミヘルスへの手紙でこう評している。ミヘルスのパーソナリティーを鋭く見抜いた文章といえる。ウェーバーの類型でいえば、「純粋な情念の炎」が燃えたぎっている「心情倫理」の持主ということになろうか。（モムゼン・一〇三頁）パーソナリティーの質と思想との関係は、ミヘルスの場合、実に興味深い問題を投げかけることになる。挫折と転向に関連してくるからである。（この視点からのミヘルス論としては、*A. Mitzman*, "Sociology and Estrangement," 1973. があげられる。）リンスによれば、ミヘルスの政治関与（SPD左派、革命的サンディカリズム）は、彼の知的関心にのみ基ずいているのではない。それは、「情熱、行動、若さ、結果を問わない原理そのもの、そして象徴的な振る舞いへの彼の愛着」に関係しているのである。「実に、彼の初期の政治姿勢——主意主義的見地へ向っての彼の知的発展——こそ、後のファシズムに対する親和性の土台になったのである。」（*Linz, J. J.*, "Robert Michels" in "International Encyclopedia of the Social Sciences," Vol. 10.）

モムゼンは、このようなミヘルスの性格的特徴はウェーバー自身のそれと触れ合うものがあったと述べているが（一〇三頁）、とにかく、二人の友情は確かに親密なものであった。ミヘルスは自分の主著『現代民主主義における政党の社会学』（乃至『政党政治の社会学』初版、一九一一年）をウェーバーに捧げている。といって、この親密な関係が緊張や相克を含んでいなかったというわけではない。

いうまでもなく、ミヘルスはハイデルベルクのウェーバー・クライスの一員であった。ウェーバーは、このなうての社会主義者、サンディカリストである若きミヘルスを公私にわたり支援し、庇護し、激励し続けた。一九〇六年、ミヘルスはウェーバーの推薦で『社会科学および社会政策アルヒーフ』の定期的寄稿者になり、一九一二年には、ミヘルスを自分に替って共同編集者にさせるため、ウェーバーはヤッフェやゾンバルトにはたらきかけてもいる。

ウェーバーが、社会主義者であるためドイツの大学に受けいれられなかったミヘルスを弁護し、ドイツにおける「学問の自由」の欺瞞性を糾弾したことはよく知られている。ウェ

ーバーはトリーノのミヘルスに書いている。「これをイタリア、フランス、いやそれどころか、現代ではロシアの状態とさえ比較して、私はこれを文化国民にとっての恥等であると言明する。」そして、「いわゆる教職の自由」と題した論説をフランクフルト新聞に発表した。その中でウェーバーは、ミヘルスが教授職を得られなかった決定的な理由は、彼が自分の子供たちに洗礼を受けさせなかったからだとする見解をとりあげ、「そのような見解が支配しているかぎり、われわれが〈教職の自由〉といったものを持っているかのように振る舞うことは、私には全然考えられない」と断じたのである。他方、ウェーバーは、ミヘルスに、研究者と党派人とを峻別し、学問的仕事に集中するようにと忠告することも忘れなかった。ただ、こういうウェーバーの期待に、ミヘルスはいつもこたえていた、というわけではないが。（モムゼン・一〇二頁）

(二)　非対称的なパートナーシップ――帝国主義者ウェーバー

一九〇七年、ミヘルスはイタリアのトリーノへ移り、アキレ・ローリアのもとで教授資格を得、経済学の私講師となった。ミヘスルにおけるイタリアへの心情的な肩入れの具体的な第一歩である。

一九二六年、ミヘルスは、「私の感情と好みはラテン的である。私の精神の組成はラテン的である」と書いている。さらに同じ頃、「私は生れはライン、血はフランス、心はイタリア」とも語っている。（レーリッヒ・九頁）彼の反プロイセン主義は、社会主義的インターナショナリズムと表裏の関係にあるといえる。しかし、プロレタリア・インターナショナリズムからイタリア・ナショナリズムへの転向は、ミヘルスの内面では、決して急速なものではなかった。

「ミヘルスの生れた環境はコスモポリタン的であった。」（リンス・二六五頁）彼の家系には、精神的にも文化的にも、ドイツ、フランス、ベルギーの血が流れ込んでいたからである。晩年、ミヘルスは、新しい「ライン＝プロイセン」とは対立する「フランス＝ゲルマンの連帯」の歴史を象徴する、歴史的中間領域としてのケルンについて誇らしげに語っている。（コンツェ・『政党政治の社会学』新版へのあとがき。邦訳四五八頁）従ってミヘルスはインターナショナリズムの環境の中に生れついた、といえるのである。このことは、イタリア・ナショナリストとしてのミヘルス、さらには、ミヘルスのナショナリズム論を評価するうえで重要な事実である。

一九一三年、ミヘルスはイタリア国籍を取得、翌年、経済的理由からバーゼル大学へ移り、そこに一五年間とどまることになる。ミヘルスにとって国籍とは、血や環境ではなく「意志と決断」の問題であった。（レーリッヒ・一〇頁）、ミヘルスは自然的民族性を対象化する視点をもっていた。新しい国籍を得たミヘルスにとって、第一次世界大戦は巨大な試金石を意味した。一九一五年、ウェーバーと決裂。一九一五年、バーゼルにあったミヘルスは、イタリアの参戦を強力に支持し、正当化する論説を『バーゼル報知』と『新チューリッヒ新聞』に書いた。その中で彼は、イタリアの失地回復を弁護し、オーストリアに対する「不実と違約」という非難を拒け、参戦を「オーストリア領内の国土の解放と民族の体面とを一致させる」チャンスと受けとめた。「イタリアは自分でやるだろう」とのスローガンのもと、イタリア人は「地理的に、己れの肉に突きささっているハプスブルクの帝国に対して、民族としての自己を主張しなければならない」、「イタリアの空」に「ドイツ＝オーストリアの花」を咲かせてはならない、と。

ミヘルスは、ウェーバーにはイタリアの参戦理由がわからなかったのだ、と本評伝で語っているが、このようなミヘルスの発言はウェーバーのナショナリズム（ミヘルスは、ウェーバーの「帝国主義」を指摘している。一二〇頁）を刺激せずにはおかなかった。ウェーバーは、ミヘルスをたしなめる手紙を書いた。「君は自分をイタリア人と感じている。つまり、君は二重の祖国をもっているわけだ。それは君の運命である。その運命はどうすることもできないし、君にはそれを変えるつもりもない。そういう状況の下、君にはいくつかの権利がある。我が国が――大国の中では我が国だけであるが――存立をかけて戦っている他ならぬ今この瞬間、我々に許されているのとは別な風に感じる権利がある。しかし、君の母国に対する義務があるというのも確かなのだ。……わけても、状況によっては沈黙するという義務である。」（レーリッヒ・一一九頁、傍点は原文イタリック体）しかし、ミヘルスは沈黙しなかった。それどころか、ウェーバーの怒りを一層かきたてるような不手際も加わり、事態は紛糾を極めることになる。当初、『バーゼル報知』はミヘルスの文章を「一イタリア人の寄稿」と紹介していたのだが、次の『新チューリッヒ新聞』では、編集者によって「一ドイツ人より」と書き加えられたのである。ウェーバーにとって、これはこのうえない不謹慎、悪趣味であった。翌年の『新チューリッヒ新聞』は、ミヘル

スの論説掲載に際して、彼の実名を出し、「ミヘルス教授はケルン生れ、かってトリーノに住み、現在はバーゼルに住んでいる。帰化したイタリア人で、現代のイタリアについて最もよく知っている人である」と編集者の注をつけている。

さて、このミヘルスとウェーバーとの「亀裂」を、二つの帝国主義の対立の現われとして片づけてしまうこともできよう。しかし、この点でも、ウェーバーはミヘルスの師匠であった。即ち、レーリッヒもいうように、ミヘルスは、ウェーバーが強調していた「民族的な権力本能」を、自分の選びとった祖国 Wahlheimat に適用しただけなのである。権力政治の論理を民族に役立たしめることを、ミヘルスは自分の師匠から学んだと考えられるからである。（レーリッヒ・一一九頁）ウェーバーがドイツに対してとったのと同じ姿勢を、ミヘルスはイタリアに対してとったのである。ただ、二人は相敵対する二つの国民に属していた。友情の破綻は必然的であった。「少なくとも私的なかたちでは。」（本文一一八頁）しかし、ウェーバーは、それでも、最高の裏切りとするドイツの学界に対して、ミヘルスを弁護し続けたといわれる。例えば、ミヘルスは『アルヒーフ』の共同編集者の地位をおりざるを得なかったが、その際ウェーバーは、ミヘルスを弁護する長い手紙をシュモラーに書くほどであった。（モムゼン・一〇二頁）

ミヘルスは「意志と決断」によって選びとった新しい祖国、イタリアのスポークスマンになった。後に彼は、この大きな転換を概念化しようと努力した。「時に、……他の民族の選択へと至る選択的親和力 Wahlverwandschaft というものを認めることができる。この場合は新しい祖国愛が形成される。この純粋な選択的親和力の絆は、生来的親和力 Geburtsverwandschaft の絆を破砕し、人間の祖国を求める固有の欲求に古い方向とは反対の新しい方向を示してやるのである。」（レーリッヒ・一二〇頁）この言葉は、彼の個人的な告白を意味するとともに、彼の行なった決断を合理化しようとするものである。それだけに、ミヘルスのナショナリズムとナショナリズム論とは、この選択的親和力概念を考慮に入れて評価する必要があろう。

㈢　非対称的なパートナーシップ――ウェーバーの鬼子・ミヘルス

ホーニヒスハイムは、「ウェーバーが支援したにもかかわらず、その支援に対してウェーバーにあまり感謝しなかったハイデルベルク・サークルのメンバー」として、ゾンバルト

とミヘルスはあげている。ゾンバルトは紆余曲折の後「ヒトラー主義の近くにたどり着」き、ミヘルスは「立派なファシスト」として死んだからである。（ホーニヒスハイム『マックス・ウェーバーの思い出』邦訳・二一頁）しかし、ウェーバーと「立派なファシスト」ミヘルスとの関係はそれほど単純ではない。

この問題の検討のまえに、指導者乃至エリートと民主主義の評価に関する、パレート、ウェーバー、ミヘルスの見解の異同についてまとめておこう。というのも、ミヘルスは、パレートとウェーバーを現代社会学の偉大な双生児」と呼び、二人が互いに話すべき多くのことをもっていたはずなのに、学問的交流をもたなかったことを「不可解」としているからである。（本文・一一三頁）モスカやパレートのエリート理論については、他ならぬミヘルス本人を通して、ウェーバーもある程度知っていたということは充分考えられる。ウェーバーが二人の名を一度も引用していないことについて、ミヘルスは、ウェーバーが「根っからのドイツ人」であったからだと述べているが、聊か皮相な見方であろう。そうではなくて、ウェーバーにとって、エリートの存在は、事実としては余りに明白なことであったからである。（モムゼン・一一〇頁）

その意味では、「双生児」説が妥当する。しかし、そこまでである。エリートや少数者支配が民主主義にとってどういう意味をもつかという点に関して、ウェーバーとパレートは正反対の評価だったからである。パレートはエリート理論によって民主主義を否定しようとしたが、ウェーバーは、有能な政治的指導者が政治過程にどれだけ有効に参加するか、それが現代の大衆民主主義にとって決定的な問題であると考えていた。ウェーバーにとって、民主主義を危機におちいらせるのは、エリートではなく官僚制であった。ウェーバーはドイツ政治の民主化について腐心し、行政官僚の対重としての議会の強化と活生化を主張したが、その際、議会は、政治的に有能な指導者を選抜し、きたえあげる場所として位置づけられた。

被選出者である指導者が、選挙人を度外視して、自己の権力の維時と永久化をはかる傾向――エリート論からいえば、エリートが選挙人をして自己を選ばせるという命題で簡単に説明しうる――に対する悲観主義が、ミヘルスの『政党社会学』の基調をなしていた。ウェーバーにとっては、むしろ逆で、職業としての政治、即ち、真の政治的指導者（その究極にはカリスマがある）と民主主義とは相補的である。政治過

程の民主化には職業的政治家が必要なのである。しかし、ミヘルスのルソー流の「根元的民主主義」観（モムゼン・一一二頁）からすれば、「職業的〈指導者層〉が形成されはじめることは、〈民主主義の終わりの始まり〉を意味する。」（『政党政治の社会学』一四八頁）ウェーバーはこのようなミヘルスのユートピア的な民主主義をくり返し批判していた。例えば一九〇八年八月の手紙にはこうある。「君は、いまだに、どれだけの諦めに耐えねばならぬというのか。私にとっては、〈人民の意志〉とか〈人民の真の意志〉というような観念はとっくの昔に存在しなくなった。それらは幻想でしかない。」（モムゼン・一〇七頁）しかし、この〈人民の意志〉がカリスマ的指導者とむすびつき、両者の間に序め同一性が前提されるとき、一種の「人民の直接統治」としてのファシズム正当化論が生ずるのである。（レーリッヒ・一五四頁）

ウェーバーのカリスマと概念ファシズムとの関連は微妙な思想史的問題である。ミヘルスのファシズム転向にウェーバーの理論はどのような役割を果したのか。

結論的にいえば、ミヘルスは、ウェーバーのカリスマ論によってムッソリーニを正当化し、ウェーバーの指導者民主主義論、その「最も重要なタイプ」としての「人民投票的民主主義」――これは究極的に「一種のカリスマ支的配」である――をファシズム流の指導者原理へと解釈しなおした。そして、そのような転釈の可能性は、ウェーバ自身の理論が全く排除していたわけではない、ということである。

一九二五年、ムッソリーニ暗殺未遂事件が起きた時、「君はイタリアそのものだ」というキャッチフレーズが唱えられたが、ミヘルスはそれを次のように解説した。「大衆は、その祖国と愛すべき統領との間に区別を設けようとは欲しなかった。それほど彼のカリスマは偉大なのだ。」（一九二七年。レーリッヒ・一六〇頁）三年後の著作『今日のイタリア』で、ミヘルスははっきりと自分の師匠の名を出した。「ムッソリーニは、マックス・ウェーバーがカリスマ的指導者によって説明しようとしたものの現代版である。」（"Italien von Heute," s. 267.）

ウェーバーは、「カリスマ的正当性」はもともと「権威主義的」なものであるが、「反権威主義的」にも解釈できると語っていた。何故なら、カリスマ的権威の正当性は、事実上、「被支配者たちによる承認」に依存しているからである。（ウェーバー『権力と支配』濱島朗訳・七三頁）しかし、その承認の具体的形式の特徴は、情緒的な喝采と人民投票にあ

った。

ところで、カリスマの威力は何よりもその否定の力にある。「カリスマ的支配は、規則とはおよそ無縁であるという意味で、ことのほか非合理的である。……カリスマ的支配は、（そのおよぶ範囲内で）過去を転覆し、また、この意味で特殊に革命的である。」（『権力と支配』四二頁）一九二五年、ムッソリーニは、既存のあらゆる自由主義的、民主主義的拘束の撤廃に乗り出した。議会主義も否定された。

ウェーバーは、第一次世界大戦後の政治的混乱の中で、議会制と政党政治の「ルーティーン化」に幻滅し、しだいに人民投票的指導者民主主義へと傾いていった。（上山安敏『ウェーバーとその社会』二三五頁）ウェーバーは「人民投票的支配」について、「人民投票は、形式的には、被配者たちの（形式上または擬制上）自由な信任から支配の正当性をひき出す独自の手段なのである」と語っている。（『権力と支配』七四頁）ファシズムはこの形式的な自由を否定した。ミヘルスはそれを同一性の先決論（レーリッヒ・一六六頁）によって合理化した。「しかし」とモムゼンは問うている、「ミヘルスが、ウェーバー自身、程度の差はあれ、単なる形式的重要性しか与える気のなかった投票という行為を放棄したとしても、それは、ウェーバーの概念構成からの本当に実質的な逸脱だったのだろうか。」

一九二七年、ミヘルスは、カリスマ的支配から民主主義的な形式――ウェーバーはカリスマ的支配の、被配者による「承認」の方向への解釈について、「民主的正当性」と付記していた――を払拭し、むしろ、それと対立するものとしてカリスマ的指導原理を全体主義的に定式化した。「民主主義では、意思の信託行為に際して、その意思が潜在的にはその差出人の手元にとどまるかのような外観が保持されるのだが、他方、カリスマ的指導制の場合、大衆は、自覚的な賞讃と崇拝の念をもって、さらには、明白な自由意志による犠牲的精神とでもいえる形で、自らの意思を指導者へと譲渡する。」（“Grundsätzlihes zum Problem der Demokratie,” in “Zeistchrift für Politik,” XII, 1927. s. 291.）モムゼンは、この文章に関して、次のように述べて彼の論文をしめくくっている。「ウェーバーは、このような、カリスマ的指導者という自分の概念の全体主義的な解釈を予想もしなかっただろうということは疑いない。にもかかわらず、ウェーバーの著作と彼の思考方法を、カール・ヤスパースを別にして、おそらく他の誰よりも知悉していたミヘルスが、マックス・ウェ

ーバーの多面的、かつ、多くの点でアンビバレントな政治社会学の示唆した、現代の大衆政治に関して可能な対局的な解釈の方向を明示した、という主張もなりたつであろう。」（モムゼン・一一六頁）ミヘルスはウェーバーの鬼子であった、といえるかも知れない。しかし、同じミヘルスは、ルソーや社会主義や革命的サンディカリズムの鬼子でもあったのである。

（尚、本文「マックス・ウェーバー」の翻訳に際しては、三吉敏博氏の懇切丁寧な御教示にあずかった。ここにあらためて謝意を表するものである。）

マックス・ウェーバー

"Nuova Antologia," 16 decembre 1920.

"Basler Nachrichten," Nr. 269, 14 Juli 1920.

一九二〇年六月一四日、マックス・ウェーバーが死去した。そのあまりに早過ぎる死は、戦争という狂気に対する罰としてヨーロッパを襲った悪性の流行性感冒による数多くの病死の中でも、最も痛ましいものの一つと考えるべきである。マックス・ウェーバーが身罷ったということは、学者、政治家、そして人間として、どの点をとっても重要でかつ魅力的な人物が一人失われたということを意味する。マックス・ウェーバーは、非常に多彩な才能の持主であった。精緻な学問の人、頭の先から足の先まで学者であり、学問をまるで恋人のように熱愛した人である。彼は、国民経済学者、国法学者、社会学者、宗教史家であっただけではない。実践的な政治家でもあり、オーガナイザーでもあった。わけても重要なのは、まことに悪魔にとりつかれたかのような人物であったということである。

マックス・ウェーバーは、一八六四年四月二八日、エアハルトの天分豊かな、学問的にも政治的にも自由主義的な伝統に満ちた家庭のふところで生を受けた。父親は国民自由党の代議士であった。マックス・ウェーバーは、ギムナジウムでの学業を終えるとベルリンで大学入学資格を取得した。彼は、ベルリン大学でゴールドシュミットとモムゼンの指導を受けながら法学、歴史学、経済学を学んだ。そして、中世商業会社の歴史に関する優れた学位請求論文によって、学位を取得した。彼の経歴は、輝かしいものだったといえる。いわば破竹の勢いであった。ベルリン大学で一年間私講師を勤めた後、一八九三年、二九才にして、彼は、同大学の商法担当員外教授に任命された。その一年後にはもう、ウイーンに移ったオ

イゲン・フォン・フィリッポヴィッチの後任として、フライブルク大学から、国民経済学担当正教授としての召聘を受けることになった。一八九七年以後、マックス・ウェーバーは、同じく正教授として、ハイデルベルク大学で国民経済学の講義をしている。ここでの地位は彼には非常に好ましいものであったが、重い神経障害のため、一九〇三年にはそれを断念せざるを得なくなった。その後は障害も時折しか現われなくなり、彼は、研究時間をたっぷり手に入れることになった。愛すべき教職から離れていることは常に悩みの種ではあったが、この研究時間が無かったとしたなら、彼が学問の世界におけるパリパリの現役として、巨大な仕事を為し遂げるというようなことは決して無かったであろう。従って、マックス・ウェーバーの場合、後世の人びとはこの発病に感謝しなければなるまい。〔第一次…訳者注。以下同じ。〕世界大戦中にやっと、自分の思想を伝え広めたいという学者本来の衝動と病状の緩和とがむすびつき、彼は、あらためて、あちこちの一流大学の名誉ある教職を受け入れる用意ができたのである。

マックス・ウェーバーは、その生涯を通して、政治へのやみ難い衝動、政治の場で発言し政治的行動をなしたいという衝動から自由になることは無かった。民族主義色の濃いゴリゴリの国民自由主義右派の見地から出発したウェーバーは、ドイツ内政の政治的欠陥、そして彼をいたく立腹させたその内政における国家的無責任さに反発し、しだいに左へ左へと立場を移していき、『フランクフルト新聞』に政治的文章を寄稿したり、それを政治的に支援するまでになった。その移行と共に、社会主義に対する姿勢も変わっていった。当初は社会民主主義をきっぱり拒絶していたのだが、後には、現代政治の重要問題では社会民主党に同意を示すようになっていったからである。とりわけ、彼は、社会主義者を社会的に葬り去ろうとしたり、社会主義者の私講師を一掃することで社会の安全を確保しようとしたりする、ドイツ・ブルジョアジー出身の政治屋や学者どもの俗物根性とは、一切無縁だった。国家の任命するあらゆる地位から締め出された、多くの、これら研究者達が道徳的にいかに優れているか、また客観的な学問のうえでもいかに優れた力量の持ち主であるかということは、マックス・ウェーバーには否定しうべくもないことであった。それとは対照的に、ウェーバーを社会民主党から遠去けたものはというと、それは、彼が自ら強く称揚した純粋に自由主義的で個人主義的な世界観と思惟様式にあったことはいうまでもないが、その他に、党官僚の大多数に特徴的な

小市民的な俗物根性があった。彼ら党官僚たちは経済的な上昇によって優越的な地位に就いたのだが、今や、おしなべて「肥え太った宿屋の親爺風の顔つきと小市民的な人相」をはっきり示していただけではなく、例の、国家官僚のうちに非常にはっきりと認められるような、自分たちは神に似ているのだという素朴な信念や、そのような態度に相応した、民主的な感受性の絶対的欠如をも示していたからである。

〔第一次大〕戦後、マックス・ウェーバーは、確信をもった共和主義者となった。民主党に精神的な新方向を与え、今や、自分がこよなく愛した民族の運命に文筆をもって加担することになったウェーバーは、暫くの間、まるで最も偉大な任務に召命されたかのようにみえた。小人数とはいえ当時は影響力もあり、精神的にも道義的にも最適任者と思われた一団の人びとは、マックス・ウェーバーの中に、まさしく将来のドイツ人を苦悩から救済してくれる人物を見出したのである。このような世評に促されて、学問の人ウェーバーはハイデルベルクの書斎からドイツ講和代表団の一員としてヴェルサイユへおもむき、そこでハンス・デルブリックやモントゲラス伯爵と共に覚書作製たずさわった。しかし、この世評は彼をそれ以上遠くへ導いていくことはなかった。ウェーバーをワイマールの国民議会へ選び出そうという、ささやかな計画は挫折したからである。アイスナーの後援もあってミュンヘンに引き返えしたウェーバーは、そこでブレンターノの後任として国民経済学担当の教授に任命された。彼の政治的経歴は始まるや否や終わってしまったのである。マックス・ウェーバーは、彼の中に隠されたラインの黄金を役立て得るほどには、彼の国民から正しく理解されてはいなかったのだろうか。事実、彼の友人の多くはウェーバーのやり方についてそのようにみている。確かに、ある意味ではそれも当っている。ホーエンツォレルンの国家の崩壊後ドイツの運命が次々と場当り的に委ねられた人たちのみせかけの総合性を、ウェーバーははるかに凌いでいたからである。彼の精神、彼の学識、彼の信望、そして彼の意志力が祖国の繁栄のために用いられたならさぞかしうまくいったことであろう。しかしながら、マックス・ウェーバーは過ぎ去った時代に余りに強く執着していた。ウェーバーの中には帝国主義の思想が息づいていたからである。かつて彼はフライブルクの学問的な就任演説の中で檄をとばしたものである。「もしもドイツの統一が、ドイツの世界的権力政策の終わりであって出発点ではないとするならば、ドイツの統一は国民が過去の日に犯した若気のあや

まちであり、そのために払った犠牲の大きさを考えると、むしろ、なくもがなの仕業であったこと、われわれはこのことをハッキリと知らなければなりません。」晩年、政治の本質に関する彼の考察は、政治の根底に横たわる力の要素と暴力行使とを客観的に承認することにおいて極まった。フリートリッヒ・ウイルヘルム・フェルスターの倫理的なとらえ方――ウェーバーによると、これには、決して「結果」については問わないという欠陥がある――に真向うから反対したウェーバーは、政治家は追求さるべき崇高な目標連関に、そのための手段の選択を従属させるべきだと公然と主張し、共鳴しつつマキァヴェッリを引用した。マキァヴェリは彼の英雄の一人をして、「彼らの魂の幸福よりも、故郷の町の偉大をより高くみた」かの市民を賞讃せしめている、と。ウェーバーがドイツ・プロイセンの君主、ウィルヘルム二世の事件に関して加えた痛烈な批判もまた、ほとんど専ら、支配グループの技術的無能力と責任感の欠如、それに国法体系の侵犯に集中していた。

筆者とマックス・ウェーバーとは、幸運にも長年にわたる親密な交友関係にあった。もっとも、その交友関係は、戦争の始まった頃、少くとも私的なかたちではこわれてしまいはしたが。従って、戦時中の彼の見地と戦争に対する彼の姿勢について、故人のことを論ずるのは筆者の適任ではない。マックス・ウェーバーは誇りと品位をもって彼の思想的責任を引き受け、ドイツ権力国家の崩壊に深く悩んでいた。しかし彼は、疑いもなく本質的な一点、即ちエルザス・ロートリンゲン問題については、歴史家の大胆さと倫理家の論理とを同時に駆使して世界大戦という事件から結論を引き出した。一九一八年秋には、ドイツの統一、そして出来ることなら（これはドイツ人自身が望んだらの話なのだが）ドイツ・オーストリア合併を含んだ統一の熱烈な支持者であることを告白したある論説の中で、ドイツ人はかつての帝国領土を結局は放棄すべきである、と述べる勇気をもっていた。エルザス・ロートリンゲンの国家的運命、即ちフランスへの併合は、「核心はドイツ的であるこの領土を内心からドイツのものとすること」に旧体制がこの五〇年のうちに成功できなかったかぎりは、少くともこの領土の独自性が保持されんことを希望しつつ、「誠意をもって受け入れねばならない」、と。(1)

(1) フランクフルト新聞におけるマックス・ウェーバーの連載記事（一九一八年一一月）「ドイツの国家形態」

ウェーバーの最後の政治的行動は、ミュンヘンの学生団体

の悪質なショーヴィニズムを、公けの場で、公然と、かつきっぱりと否定することであった。それは、例のアイスナー首相の狂信的暗殺者、アルコ伯爵の特赦を求めてバイエルン州の首都の大学生によって展開された扇動に対するものだった。もっとも、数週間前マックス・ウェーバーは講壇の高みから同じように公然と、アイスナーの政治的行動を、災いをもたらすものとして、また国民的観点からみるなら「価値の無いもの」として指弾してはいたのだが。

マックス・ウェーバーの世界と人間についての知識はドイツ国境内にはとどまらなかった。マックス・ウェーバーは頻繁にしかも喜んで旅に出た。彼はイギリスを見聞して歩き、そこで交友関係乃至その交際仲間の気難しさや無骨さから、カルヴィニズムとセクト主義と経済との関係に関する宗教史的研究に有益なものを数多く学びとった。彼は南フランスにもしばしば滞在し、そこの土地や人々に慰めを見出した。イタリアに対してもマックス・ウェーバーは好意的な見解を抱いていた。イタリアの経済学について、また政治学の諸教義についてはなおのこと、精通していたとはいえないまでも、それらを評価するには充分に熟知していた。トリーノでは私を介してロリアと接触をもった。古典的な国家論者ではマキ

アヴェッリとボテーロを高く評価していた。現代の国家論者の中では特にガエターノ・モスカを知っており注目していた。彼の語るイタリア語は正確とはいえないまでも、かなり洗練された流暢なイタリア語だった。トリーノのジュリオ・カッサリーニ家の午餐におけるマックス・ウェーバーは、今でも私の思い出の中に鮮明に残っている。初めのうちウェーバーは黙り込んで物思いにふけり、陽気な南国の大騒ぎに耳を貸していただけだった。それがデザートの時間になると突然活気づき、機知に富んだ逸話を熱心に語り始めたのである。中でも、彼のオハコである、死んだロシアの将軍と死んだ小母さんの話に及んだときは、同席の者は皆、細かな事柄にも示された彼の天分に魅了されてしまった。もしかしたら、彼を最も夢中にさせたものはやはりロシア的なるものだったのかも知れない。ロシア的なるものについては、ロシアの立憲主義に関する論文の中で報告していたからである。この時は、この目的のためにまたたく間にロシア語を習得し、友人達は少なからざる驚嘆と羨望の念にかられたものである。

ところで、マックス・ウェーバーは、精神的な洞察力と、量り知れぬほど広範囲にわたる事実についての知識を有していたにもかかわらず、やはり根っからのドイツ人であったた

め、ドイツ人以外の人間やドイツ以外の情勢に親身に接するまでには至り得なかったと述べても、友であり学者である彼の霊を傷つけることにはなるまい。読書にしても、また、もともと彼には稀な著者名の引用にしても、彼は無意識のうちに同国人を優先させていた。

不可解なことが一つある。マックス・ウェーバーがヴィルフレード・パレートというような人物を名前でしか知らなかったということ。もう一つ、ヴィルフレード・パレートはマックス・ウェーバーを評判でしか知らなかったということ。従って、現代社会学の（ガブリエル・タルド亡き後）偉大な双生児は、互いに語り合える多くのものをもっていたのだろうが、別々に考え、語り、書き、教えそして発見したのである。こうした、マックス・ウェーバーと外国とのうすいつながりは、世界大戦中にとくにはっきり示された。つまり彼は、当時でもなお、エルザス問題を本質的には全く「誇張されたもの」とみなし、大革命にまで遡るフランスの伝統をほとんど完全に看過していたのである。また彼は、一九一五年にイタリアを協商国側について参戦させた理由を全く見逃した。旧知の間柄に亀裂（あらゆる人間心理の洞察に依れば、戦後には再会も話し合いも容易になしうるような亀裂ではあったが）をもたらすことになった筆者宛の手紙の一つで、マックス・ウェーバーは、イタリアの関与を、海洋を支配するイギリスに対する怯懦のなせる仕業と形容した。巨大な内陸国のドイツ人は外国の政策を理解することにはむいていないようであった。

ところでマックス・ウェーバーは、人間としてはこの上なく偉大であった。この点で彼は周囲から抜きん出ていた。彼の気性は、完全に抑制された――といっても、いつも抑制されていたというわけではないが――灼熱のようであり、その放つ熱は太陽熱と同じように、広範囲にわたって樹々に豊かな花を開かせたのである。というのも、彼の与えた刺激は、批判的であっただけではなく人間的でもあったからである。一方、その灼熱は、焼きこがす力も持っていたのであり、それに触れる者は誰もやけどを負わずに離れることはできなかった。しかし、この人物の偉大さは、彼の最終目標の道義性、気高さ、純粋さのうちに現われていたことはいうまでもない。それは彼の感受性においても同様で、あらゆる怯懦、あらゆる愚劣に向って彼の憎悪がほとばしったのである。「民衆」であれ、党の「お偉方」であれ、やたら物を書きたがるが政治的には未熟な同僚であれ、これほど多くの人々に、これほ

ど公然たる批判と侮蔑を投げつけた者は、この民主主義者を措いて他には一人として無かった。この同僚たち、公共的な学問の士に対して、彼は、「国の禄を食む者」として、彼らの独立心の無さと追従癖とを責めたてた。教授資格証明書や教授の地位は、政治的能力の存在をも、いわんや政治家に必要な性格の所有をも保証してくれるわけではない。「街頭の愚しい憎悪」に対するこの愛国者の反感は非常に強く、彼は最後の著作の一つの中で、ためらいもなく、しばしばはっきりと敵国イギリスを引き合いに出しながら、彼自身の表現を使うなら、「このような譲歩は決して」民衆に対してなしてはならない、と語ったものである。

マックス・ウェーバー〔の演説〕には、豊かな道義的内容はもちろんのこと、そのうえに見事な様式美があった。ウェーバーの演説は感動的で、洗練され、情熱にあふれ、そのうえ的確だった。たとえば社会学会の専門的報告の場合はたいていそうなのだが、退屈なテーマでも、ウェーバーの手にかかると輝き出したのである。確かに彼は、悪性の神経障害のために、一〇年以上の間、規則的な講義からは遠去かっていた。しかしながら健康が許し、大学の教師として活動することが出来る時はいつも大成功をおさめた。終戦より二年前の冬、

召かれて試験的にウィーン大学で国民経済学講義のため講壇に登ったときには、四百人の聴衆が、薄暗く寒い大講堂の中で、マックス・ウェーバーの数時間に及ぶ講演に聞き入ったのである。それはかつてのベルリンのフィヒテの場合とそっくりだった。ただウィーンでの学問と希望の雅歌も、〔戦争による〕失望をなだめ忘れさせることは出来ても、たてなおしてやることは出来なかった、という違いはあるが。

それにもかかわらずず、指導という問題に関してマックス・ウェーバーは自分独自の見地を保持していた。彼は、指導者になることも、予言者になることも固辞した。カール・ヤスパースが正しく指摘したように、この点に関して彼は過度に敏感で、「自分の異常な個人的な活動を危険だと意識していたからである。」[1] 他方でウェーバーは、大衆自身の側から呼びかけがなされた場合は喜んで、彼の目指した目標へと導いて行くつもりではあったのだが。ともかく、狭義の政治家になるには、権力への意志と個人的な野心とが彼には欠けていたのである。[2]

(1) *Karl Jaspers* "Max Weber." Rede. Tübingen 1921, Mohr, S. 24.〔樺原訳、一四二頁〕

(2) S. 18.〔一三五頁〕

マックス・ウェーバーはルネッサンス人であった。彼は法学、音楽理論、社会学、国民経済学、宗教、認識哲学、応用政治学と、多様な対象に精力的にとりくんだ。マックス・ウェーバーは、驚くべき身軽さで一つの学問分野から次の学問分野へと次々と移って行ったのだが、これには驚嘆させられたものである。しかし、彼は、どの分野でも徹底的かつ誠実であり、同時に高遠なる情熱に導かれていた。彼が種々様々な学問に猛然と突き進んで行ったということは、その着手の仕方についてのみ当っているのであって、論述と完成の仕方については当っていない。論述と完成の仕方という点では、彼はむしろそっけなく、一つの段落のすみずみに至るまで極端に用心深く慎重であることが多かった。なかんずく初期と中期の著作では、それまでの「その道」の大御所によりかかりながら、ほとんど過剰なほどの慎しみ深さを示した。時にはまるで、物を書くということが何か不遜な行為ででもあるかのように、何かを主張するということが学問の僭称であり冒瀆的行為ででもあるかのように。個々の著作では、彼は、ほとんど無器用といってもよい。長い注記は本文の範囲を越えて延長され、注記に隠された命題の数が本文のそれを上まわるほどであった。

マックス・ウェーバーの残したもののうち、さしあたり学問上のことでは、ここでは暗示的に述べることが出来るだけである。独立した大きな著作や数巻に及ぶ文献はもちろん、国民経済学上の基本線についてさえここでは触れることは出来ない。ただ、この間、ウェーバーのものを大量に出版しているテュービンゲンのジーベックのような、新しいスターの普及に投機するよりも精神の王国の偉人への思いの方を大切にする一出版者が数巻にまとめた論文集、そこに収められた一連の優れた研究のことについては一言述べておかねばなるまい。その際、マックス・ウェーバーの「人気」が、友人や崇拝者が思った以上に、出版者の側でははるかに高かったという事実を明示できよう。しかし、ウェーバーの生存中には目に触れることの出来なかった数冊分が今日公表され、日の目をみることが出来るようになったのは、彼とは精神的にも一体である妻、ハイデルベルクのマリアンネ・ウェーバーと彼の若い友人達の献身的な努力のおかげである。没後の公刊のために時には均衡を欠いたり骨組みのみの場合もあるが、決して汲み尽すことのできない文献、しかしながら、深い洞察に満ち、理論的にも不変の価値を有するのみならず、信じ難いほど広範囲の資料に基ずいた文献、即ち『経済と社会』

がそれであり、更に、音楽理論の研究、『宗教社会学論文集』、商業史の講義録があげられよう。マックス・ウェーバーの学識の広さと深さは、彼の死後になって初めて同時代人に明らかにされ、彼らの目をみはらせたのである。ウェーバー自身が公刊した著作からはその一部だけをあげておこう。『古代農業事情』、『ロシア、擬以立憲主義に移行す』、『工業労働の心理物理学のために』、カルヴィニズムと資本主義、世俗的革命の経済倫理〔に関する著作〕、最後に、これらはドイツの敗北後のものだが、ドイツの将来の国家形態に関する四篇の政治的、国法論的著作、そして『新秩序下のドイツにおける議会と政府』、『職業としての政治』、『職業としての学問』。マックス・ウェーバーの著作では、総じて方法的意味が重要である。またその多くは、初期のものでも、全く断片的な性格をもっている。従って読者には、それらの著者は、後になってより完全なものにしようと望みながら身をさくような思いでそれらを手放したということ、たとえ、不均衡を伴いつつ、余すところなくかつ真剣に論じ尽したとはいうものの、何ら公表のチャンスを与えずに終ったということがはっきりわかるのである。

ところが、マックス・ウェーバーの場合、学問と文筆による活動に劣らず、おそらくそれ以上に重要だったのは、世話役や指導者、発議者や後援者としての活動であった。マックス・ウェーバーは、ドイツの自由な学問的活動の、最も優れた、しかも実り多い組織者の一人であった。彼のまわりには、何か崇高な観点に立って、精神を圧殺する規則、芥と化した旧弊、そして単調でくだらぬ習練を嫌悪するか、もしくは、真に学問的な問題や思想に愛着を覚えるかしながらも、大学制度の中にいまだ席を見出せないような人々、老若を問わず自由な精神の持主たちが集まってきた。

それ故に彼は、「語るべき何ものか」を有していると彼が考えた人々の友であった。彼が社会学の分野の共同研究者たちに、フランクフルト・a・Mにおける第一回社会学者大会に参加するようすすめた折、彼らの多くがいまだちゃんとした大学の職や地位に就いていないということ、それどころか、ある種の官憲の抵抗と闘わねばならないのだということが判明したのである。その中にはヴェルナー・ゾンバルト、ゲオルク・ジンメル、アルトゥーア・ザルツ、ヘルマン・カントロヴィッツ、フランツ・オッペンハイマー、フェルディナント・テンニース、そしてこれの筆者等がいた。ウェーバーは、かつて、心を許した人々の集まりで、この自作の集まりのこ

とを自ら亡命者のサロンと名付けたものである。

ネツカー河畔のツィーゲルホイザー街に面したマックス・ウェーバーの家は、彼の生存中、数え切れないほど多くのことを意味していた。一八九七年から一九一四年まで――彼こそこの時代の最も重要な文化的中心であったのだが――のドイツの精神生活にとって彼の存在は何を意味したのか、これについてはその後の研究がはじめて明らかにしてくれるである。社会政策学会での彼の活躍は精力的でこの上なく積極的だった。それだけではない。自ら共同編輯者となった『社会科学および社会政策アルヒーフ』において然り、特に自ら設立し、その二回の大きな大会（一九一〇年のフランクフルト・a・M、一九一二年のベルリン両大会）を組織し、議長をつとめたドイツ社会学会において然り、そして自ら中心になってすすめた重要な大企画（いまだ完成はしていないが）、『社会経済学講座』の発刊において然りであった。更にそれと並んで、彼は、大規模かつ雄大な計画を構想していた。たとえば、閉鎖的な大工業における労働者の淘汰と適応、職業選択と生業についての調査（これには本人用の部分的印刷物が残っている）とか、純学問的な認識目的に役立てることになっていた新聞制度についての、法外な、国際的なアンケートがそれである。

かくして、この仕事の鬼の命は突然断たれたのである。この戦いにあけくれた男は、とわの眠りについた。彼を知る人には――そして誰が彼を知らないというのか――彼の命が失われてしまったということは、なんとしても合点がいかないことであろう。